

おしっこ、おもらし、そしてお弁当

牛山 佐智恵

この春、私はこれまで勤めていた幼稚園を退職しました。保育のゆきづまり、かなり以前からこの日のくることはひそかに覚悟はしていました。が、いざとなると揺れは隠せずあえぎながらの退き際でした。今は、市内でただひとつの自由保育の園で、「おばちゃん」として保育に参加させてもらっています。正式なスタッフではなくても、ここでは、園庭のかたすみに私のいられる場があります。かたすみにいる私のところに寄ってくる子どもたちと、区切りのない一日を過ごすことができます。

まる一日を共にしていると、ときおり、今までの私には考えもつかなかったことに出くわします。たとえば

「おしっこ」。恥ずかしいことですが、「さあみんな、おしっこに行ってきた」と当たり前のように言ってきた私には、子どもがどんなときにおしっこに行くのか、頭の端にもないことでした。

これから記す記録は、おしっこ、おもらし、お弁当と、どれも当たり前として通り過ぎてきたことに、黄信号のついたような体験です。恥をかく勇気をふるい起こしてつづいてみたいと思います。

(1) はずむ気持ちとおしっこ

年少のAと初めて会ったのは、六月半ば。朝、庭の木

の下にひとりでしゃがんでいると、「なに見てんの？」と背中から声がある。小さな声。見ると、手にかばんと帽子を持った男の子がいる。「なに見てんの？」と声をかけては、いつの間にか立ち去る。私はそう聞かれるたびに、目に映るものを次々あげていく。何度もそうやって近づいてくるので、「かばんと帽子、持ってあげようか」と私の方から声をかけてみた。その手は、ずっと私の前に伸びた。この子は持っていたものを私に手渡してから、やっとその場に留まることができた。

自分の持ち物を、まるで帰りの切符のように手離さず持ち歩く子は、入園当初の年少児には幾人かいる。その子たちは、いずれも自分の居場所のことに敏感で、やすやすとはまわりにふりまわされない。

自分の持ち物を私に預けてから、やっとその場にいられたA。何度も、「なに見てんの？」と近づいてきたのも、自分の拠点となる大人を求めてのものだった。事実、お弁当を食べるときも、この子は「これ食べてい

い？」といちいち確認を求めてからでないかと、次のものに箸を進めなかった。

ところで私はというと、これまた自分の身の置きどころに、いつになく気をめぐらす立場。足は思わず庭のかたすみへと向いてしまう。Aが私を拠点としてくれたことで、私もまた自分の拠点を得たような気分になる。この子に生かされているのだという事実を素直に認められるのは、同じ足場に立つ者の共感、いわずもがなのつながりからだろう。それにしても、こんな気持を味わうのは、正直いつて久しくなかったことだった。

お昼までは、年中の女の子たちとずっと泥だんご作り。Aはそれを近くで見ている。

ところがお昼すぎになると、Aが「おだんごどうやって作るの？」と言う。そして、そっと泥だんごに手を伸ばす。しかしその手はすぐにひっこめた。そして、あわててズボンの後ろではらった。それから、急いでどこかへかけていった。

しばらくして戻ってきたAは、私に「お水飲んでき

た」と言った。と、今度は「おしっこ行ってくるね」と告げてからかけだしていった。

おしっこから帰ってきたAは、驚いたことに泥水の中に手を入れた。そして「おだんご作ろうよ」と言い、「早く作ろうよ」と言う。私はさらさらした土をAの手の平に渡し、その上から水をたらしていった。

そばにはいつの間にか年長の女の子Mが来ていた。

「いつもはA君は、どんなことやって遊んでるの？」とMに聞いてみる。「なにもしないで泣いたりなんかしてるよ」とM。

ところが、その一言で、MはAへの対応を変えた。それまではそばにいるだけというふうだったのに、さらさらの土をAの手に移してあげるのだ。するとほかの女の子たちも、手に手にさらさらの土を。たちまちAを応援する手が集まって、この子たちの間に輪ができたようななごやかさが生まれた。

それにしても、それとない言葉にさっと状況を読みとるMの耳のよさ。遊びだせたときのよろこびを知るもの

でなければ、とてもこうはいかないだろう。

ところで、Aが泥に手を出すまでには、長い「しきり」の時間が要った。まず様子を見て、どうやるのかを確認して、それからちょっと試してみても、というように。立ち上がる前の最後のしきりが「おしっこ」。遊びのきっかけをつかんだ後、Aは「おしっこ」で一呼吸おいて、「さあ」と言わんばかりに泥遊びに入った。

これは後で気づくことだが、私はそう口数の多くないこの子から、一日に一度ずつ「おしっこ」に行ってくるね」を聞いている。それはいざれも、この日同様「さあ、いよいよ」と腕まくりするようなときだ。体のはずみとおしっこのはずみ、それはすてきなものを得て、不要となったものを心残りなく捨てるのに似ている。

(2) がまんの限度とおもらし

七月初め。朝、顔を合わせるとじきにAがやってきて、それから年中の女の子Sがやってきた。

「これ、描ける石」とSがレンガの破片を拾う。Aも



この日はぐいぐいとレンガで線を描いていく。そのうち、その破片をパッと捨てたかと思うと、「おしっこ行ってくるね」。

ところが、おしっこから帰ってきたAは、背中できていた発疹を急にかゆがりだした。私はAにつきっきり。そうしているうちに、Sは「本を借りてくる」と言って走っていった。後から加わっていた年中の女の子Iも、本を借りに行った。この日は週に一度の貸し出し日だった。

Aの発疹に薬をつけて戻ってみると、Sたちはまだだった。しばらくして戻ってきたSは、私の方にしきりに体を寄せてきた。しゃがんでいる私の膝にお尻を乗せるので、こちらは体がぐらついてたまらない。

「なにしてお遊ぼう」

私は思わずそう言ってしまった。

「おだんご」とI。

Sは「たかおに」と言う。そう言ってまた体を寄せてくるSに私は耳を寄せた。すると今度は「おかあさんご

っこ」とないしょ話。

「おだんごとおかあさんごっこなら、一緒に遊べていいね」と私。

「おばちゃんがおかあさん、わたしはおねえさん、それから：：」とS。

四人連れだつて庭の方へ出るうちに、役割もあつという間に決まつて、遊びがすべりだしそうな気配だった。

落ちつき先は、庭のはずれの隅。木の下に枯れた葉っぱを見つけたIが、まず「あっ、まぜごはん作ろう」。私も一緒に泥と水と葉っぱを混ぜ始めた。

Sは「コーヒー作る」と言つて、水に土をバラバラ入れていった。コーヒーはすぐできた。私にふるまえば、ちよつと手もちぶさたというところ。「もう一杯ちょうだい」と注文してみても、それもすぐに終わる。いつもは固い固いおだんごを、それこそ時間をかけて作つていくSなのに、この日は大ちが良かった。

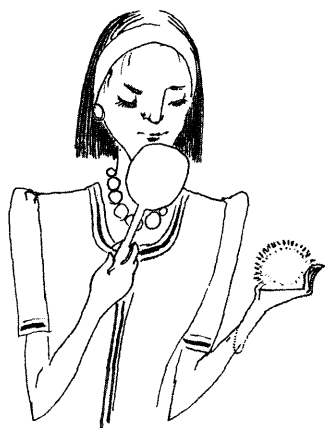
しばらくすると、「もうお弁当にしようよ」とS。まだ「まぜごはん」は作り始めたばかりだし、時計も十一

時。私はつい「まだ早いんじゃない？」と返した。

ちよつどそのころ、Aは先生に呼びとめられて本を借りに行った。ところが、本の部屋から戻ってきたAは、服がぬれたと言つて、ひどく気にしている。着がえに行くのと、なかなか帰つてこない。やつと帰つてきたと思つたら、今度は「服がない」と言う。「お弁当に」と待っているSの方は、イライラが増すばかり、また私の方に体を寄せてくることが多くなつた。かといつて、着がえがないというAを放つておくわけにもいかない。ただIは、少し前から仲間に加わつたRと、「まぜごはん」作りを続けていた。

Aの着がえに同行することにした私は、三人の女の子に「ここで遊んでね」と声をかけた。Rはすぐ同意、Iはしぶしぶ同意、Sはその間にお弁当の用意をするこゝとして、無理して同意した。Sの同意は、たぶん「おりこうだから」という私のお説教ばい押しに押されてのものだったろう。

着がえをすませたAと園庭の端をうろろうろしている



と、Sが「まだなの？」とやってきた。私は思わず「あれっ、来ちゃったの？」と言ってしまった。

そのときだった。Sが「あっ、おもしろししかった」と立ちすくんだのだ。おしっこはそれはたくさん出た。

Sのたまりにたまったおしっこを前にして私もまた立ちすくむ思いだった。Sは「おもしろ」で、私のちぐはぐな対応に「もうがまんの限度」と言っているような気がした。この光景はまた、今まで忘れていた自分のおもしろしを思い起こさせるものだった。

私は小さいころ、よくおもしろしをした。その記憶は、体中から力という力がぬけていくような感覚として残っている。それは、「失っていく感じ」というか、「奪いとられていく感じ」というか、「置き去りにされる感じ」というか、何ともみじめなイメージを残すものである。もったも、おもしろしをしたときの感じを人にたずねたことはないで、この喪失感私個人のものでしかないのかもしれない。しかし、Sとのやりとりをふり返ると、やはり、と思えるものがある。

Aの発疹騒ぎからというものの、私はSにまともにつき合っていない。Sがうれしそうな顔をしたのはただの一度、体を寄せてくるこの子に耳を寄せたときの「ないしょ」だけだった。

この日のSは最初からいたにもかかわらず、いわば「出遅れた子」だった。発疹をかゆがるAにつきっきりの私。その間に本を借りに行つての中断。しきりに体を寄せてきたのも、「すぐできるコーヒー」を作つて、ふるまうことに気持ちを向けたのも、中断をとりもどそうとする願いからだつたような気がする。

そこへ着がえの服がないというA。Sは、お昼も待て、ここに留まれと言いふくめられて、出口を失つたようながまんを強いられることになつたのだと思う。そのがまんの限界で、Sは私のところへかけよつてきたのだろう。ところが「あれっ、来ちゃつたの？」とすげない対応。重ねたがまんの報われない結果に、Sがどのようになつたか。そのがっかりが「おもらし」だつたように思える。

Sのおもらしに、私は自分のおもらしを再体験した気がする。おもらしは、失うかもしれない不安、奪いとられるかもしれない不安、置きざりにされるかもしれない不安の前で、意図に反してちがうものを手離してしまふことなのではないかと思う。

私は今でも、一番大切なものを見失いそうな不安におそわれるとき、ほんとうは手離したくないほかのものを、代わりに捨ててしまつている自分に気づくことがある。そういう意味では、私のおもらしは今も形を変えて続いているのかもしれない。

(3) 大人の隣りとお弁当の力

十二時近く、やつとお昼になつた。ござの上に並んで座つた四人の子。SとIが「ここ、ここ」と自分の隣りに私の席を指定する。Aは「ひとりで食べたい」と言う。

なにしろSのおもらしの後のこと、私もどうにかして「みんなの隣り」に座りたい。しばらく考えてつくつた

席は、私をまん中に左右ふたりずつのコの字形。Aは私の脇で、みんなに背をむけた形になる。

食事ともにおしゃべりの花も。Iは先生たちの話をしているうちに、「ウンチ先生、シッコ先生」といかにもおかしそうに笑う。私はへんてこなぞなぞを出す。すぐ続けて、Sもなぞなぞを出す。Aはいつの間にかみんなの方を向いている。食事が終わるころにはござを離れて、そばの部屋をのぞきこんだりし始める。中では年長の子が鬼ごっこのようなことをやっていた。そのうちAは部屋に入ったかと思うと、ひとりで跳びはね始めた。

お昼のおしまいは、Iが箸箱で吹く即興曲。まもなく三人の女の子もその部屋の中へ。見る間に電車ごっこが始まった。すると入れかわりにAが出てきた。Aは先ほどIたちが作った作品を見て、「変なだんご」と言ったり、「砂のは食べられないんだよ」と言ったり。そのうち、「また作ろうよ」と言う。「こわして作ろうよ」と言う。Aとの泥いじりが始まった。

遊んだ仲間と遊んだ場所で、ワイワイやりながら食べるというのは、ほんとうに楽しいもの。それはそのまま、その後の遊びの活力となって現れた。

おもろしでみじめな思いをしたSも、私の隣りで食べられたというだけで、すっかり元気をとりもどした。もう身を寄せてくる必要もない。

それにしても、「大人の隣り」とは何なのか、と思う。すぐそばで、同じ方向を向いてくれている人。それは自分の存在があやういときには困いであり、これから飛び出そうとするときには、はずみをつける踏み台のようなものなのだろうか。

なにかとハプニング続きのこの日。それをどうにかこうにかいい気分でしめくることができたのもひとえにお昼のおかげ。お弁当の威力に感謝の一日だった。

(長野市在住)